

【様式】

令和4年度 武生東高等学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
重点目標1 教育課程 および 学習支援	a:「タブレット活用で情報収集・発信するとともに主体的なポートフォリオの蓄積に取り組む。」	教員の75%以上がタブレットを効果的に利用しながら教科指導を行っていると回答している。生徒も教科により差はあるものの、概ねタブレットを積極的に活用し、効果を上げたと回答している。 生徒が理解を深めるための情報収集、発信を効率よく促すために、事前の教材研究や教師間の情報交換をする時間がしっかりと確保できるような取組を工夫していきたい。	10月の授業研究週間はもちろん、普段から同じ教科内だけでなく、他教科の授業についても情報交換を深め、タブレットの効果的な利用法を工夫していく。 授業例などを紹介する場面を増やし、教科内だけでなく、他教科でも応用できるような環境を整えていく。
	b:「教科連携による授業プログラムを実践する。」	今年度から、1年生で「情報、公共、家庭」の教科連携を開始した。毎月テーマを設定し、各教科2時間ずつ実施した。 連携により多面的にテーマを捉える点で効果が高まったが、それぞれの教科書内容の進度に遅れがでていたため、来年度は実施方法を再検討していく。 また、他の教科でも連携できるテーマの検討をますます進めたい。	授業研究週間に他教科の授業を互見する取組を始めた。教科連携のヒントにもなるので続けたい。 連携することのメリットは大きいですが、本来の授業内容にうまく合わせないと、時間数の減少によるデメリットも生じる。 連携しているテーマを年間授業計画の中にどのように組み込むか工夫していく。 今年度は実施時期が毎月末であったが、学期末などの時間を利用することも考えたい。
重点目標2 進路支援	a:「目標とすべき将来の生き方・進路を考えて進路計画を立てるとともに、その実現に向けた取組を進める。」	「進路ストーリーに基づき、生徒の進路に応じた個別指導体制」に関しては、担当する教員や、生徒・保護者とも一定の評価をしている。特に進路を決定していく3年生は、学科紹介や小論文講座などの行事もあり評価は高い。志望校を決めていく2年生には、3学期に志望理由書をまとめる行事を計画した。1年生では将来の職業(社会との関わり)と進路先を意識させる講演会を継続して実施していく。(3年83.3%、2年75.3%、1年78.4%)	各学年とも学期始めに進路ストーリーを教室に掲げ、計画性を持った進路指導を行う。また、現2年生は次年度の探究活動等が進路希望実現に向けた活動にシフトするため、徐々に進路意識に関する評価は改善すると期待している。本年度生徒玄関にオープンキャンパス情報などを張り出したが、講演会資料など進路情報をもっと掲示していくことで、更に進路意識の向上を図る。特に2年生は志望理由を考える行事を夏以降に行い、有意義なものにさせていく。
	b:「自己の適性を理解し、興味関心ある分野の探究を深める意識を醸成する。」	「大学の先生や外部指導者等からの助言や支援を受け、主体的に探究活動」に関して、1・2年生から評価が高い。1年生の理数探求基礎、2年生のグループ探究では学期毎に発表を行い助言を頂いている。その助言を自分たちの探究に上手く取り入れ、独自の調査や分析、独自の意見としてまとめる作業を充実させ、主体的な活動に繋げることが課題である。特に1年生は外部との繋がりが強い理数探究基礎やフロンティアタイムの影響が大きいと思われる。(3年71.7%、2年82.5%、1年97.6%)	新学科の理数探究基礎では、今までの探究活動以上に、多角的・複合的に事象を捉え、課題に向き合うことにフォーカスしたプログラムも準備していく。特に地元大学との連携を強化し、大学教授陣からONLINEで支援を受ける活動も展開する。また、3教科連携授業企画グループとの連携強化も合わせて進めていく。
重点目標3 生徒支援	a:「生徒自らが、校則を含めた現状の問題点を見だし、仲間と協働して、学校生活の向上を目指す。」	①「校則を含めた現状の問題点を主体的に見つけ出し、仲間と協働して改善に努めた。」に関する生徒評価が、1年生で84.0%、2年生で75.3%、3年生で71.7%である。本年度は2年・1年の後期生徒会が、統一LHを開催して生徒全体の意見を集約し、生徒会が先頭に立ち「遅刻の防止」・「完全下校の励行」を進めながら、「校則の改訂の要望書」を作り上げた。3年生がその実感がやや少なく、1年生は高校の生徒会活動に触発されたものと考え。 (教職員は75%、保護者は50%であった。)	①生徒会は、「校則改訂の要望書」まとめていく過程で、「生徒会便り」を14号まで出し、情宣をしてきたが、教員や保護者には伝わっていなかった。生徒会のリアルな活動状況を大人達に知ってもらう術があると良い。
		②「部活動や委員会・学校行事は、自分にとって学校生活を充実させるものとなっている。」に関する生徒評価は、生徒全体で約90%である。生徒支援部の仕事の柱の一つであり、高い評価で一安心である。 (教職員は95%、保護者は85%であった。)	②本校生徒は、先輩が後輩を指導することが苦手で、部活動としてまとまりが欠ける部もあった。周りからの助言が必要だと考える。

	b:「LHや行事等を通し、自助共助の意識を教員・生徒共に高める。」	「LHや行事等を通し、自然災害や防災についての基礎的・基本的知識を理解し、自助共助の意識を高めることが出来た。」に関する生徒評価が、1年生で89.6%、2年生で72.2%、3年生で68.3%である。学年で大きく違うのは、探究活動の量に比例していると考えられる。	生徒支援部としては、今年度、「全教室対応の避難経路図」を作成し直した。 時間調整が難しいものの、3年に一度は、臨機応変的な避難訓練を実施する予定である。
重点目標4 グローバル・サイエンス・SDGs	a:「SDGsの17目標と169ターゲットを調べ、自分の探究活動の中にSDGsの視点も取り入れる。」	理数探究基礎、総合的な学習の時間などの授業でSDGsの意識付けを図った。1年生は「自分の探究活動が、SDGs17目標のどの目標に関係しているか把握できる」割合が96.0%であるのに対し、2年生は68.0%、3年生は70.0%、3学年平均では78%であり、教員も71.6%に留まり、学校全体としては意識づけが不十分であった。2021年3月に「ふくいSDGsパートナー」に登録している学校としてさらなる取組みが必要である。	R5年度から2年次で始まる理数探究や地域学などの探究の授業に加え、教科間連携による探究的な授業においてSDGsへの意識醸成を行なうことなどを通して、SDGsの視点を取り入れる機会をさらに増やしていく。
	b:「英語セミナー・WHF等の学校行事を通して、異文化交流活動を推進する。また、授業やフロンティアタイム等において理数への興味をもち、探究活動を推進する。」	2月に実施した英語セミナーでは、次年度グローバルコースに進む生徒が参加し、満足度は100%であった。オンラインでオーストラリア、ニュージーランドの姉妹校をはじめ様々な海外との交流活動を実施するとともに、カンボジアなど3カ国の学生とは対面での交流も実施できた。9月に実施した国際会議(WHF)は、対面とオンラインのハイブリッド型で開催し、国内から2校20名、海外からはフィリピン・タイなど7か国130名が参加した。参加者満足度は100%であった。 新学科の設置を受けて1年生では、フロンティアタイムや理数探究基礎という授業を通して探究活動を進めている。フロンティアタイム中で評価が高かったものは、教員の得意分野に関する教養講座や自ら学習計画を立て、主体的に学びを進めるマイフロンティアタイムであった。それぞれ80.2%、96.8%と興味や関心を高めることができた。	交流ルームや共同演習室を活用したオンラインでの交流活動に加え、8月に実施予定のニュージーランドの姉妹校訪問など対面での交流をコロナ以前のように充実させていく。また、WHFについては、過去2回の実績を踏まえ、本校独自の異文化交流活動を進める行事として位置づけていく。 新学科2年目となるR5年度においては、サイエンス、クエスト、グローバルの3コースに分かれ、コースの特性を踏まえた探究学習を授業で進めていく。また、フロンティアタイムでは、サイエンスコースにおいて、理数探究の研究成果の集約と共有化、校外への発信を予定している。
重点目標5 外部との連携	a:「年間の各種教育活動内容が伝わるようなわかりやすいHPでの情報発信に努める。」	学校HPにおいて、常に最新の活動を配信してきた。目標としていたHP更新回数100回を大きく越えた。積極的な情報発信に関する実感は、適切な情報発信をした教員の割合85.7%という結果にも表れている。一方、あまりHPを見ていない保護者が49.7%いたり、中学生やその保護者の閲覧状況が把握できていなかったりするなどHP閲覧を促す取組みが必要である。	企画総務部に加え、他の校務分掌などからの原稿作成の協力を得たことで、更新回数目標達成を大きく上回る事ができた。今後とも全校をあげて、教育活動の充実と発信に取り組みたい。また、本校保護者や中学生とその保護者にもHP閲覧を通して、本校の教育活動の理解促進が図れるよう、PTAの会議などの機会を利用して、HPについて広報していきたい。
		丹南地区各中学校に学際フロンティアだよりを月1回のペースで発行し、情報発信を行ってきた。ターゲットを中学生に絞り、部活動やフロンティアタイムでの取組みなどを紙面だけでなく、動画でも視聴できるよう工夫しているが、動画の視聴回数は低調である。	学校紹介リーフレット、ポスター作成をはじめ学校説明会までの担当分掌1つが担当しており、スムーズな広報活動が実施できた。R5は、8月に中学生を対象としたオープンスクールを実施することに加え、できるだけ早期に中学生の保護者を対象とした学校説明会を実施し、中学生とその保護者のニーズにあった広報活動を行なっていきたい。
	b:「Hino・Quest(総合的探究)において世代を超えた交流の場を増加する。」	大学の先生からの助言や支援を受け、探究活動に活かすことができた生徒は、1年生で97.6%、2年生で82.5%、3年生で71.7%と学年が上がるにつれて、下がる傾向にある。特に2年生では、年間で50名を超える大学教員を招聘して助言を受けている。探究的な学習や進路につながる助言が得られるよう大学教員との連携を強化していく必要がある。	新学科2年目となる2年生は、そのコース内で深めていく課題解決に向け、多角的・複合的に事象を捉える学びを充実させることになる。グループでの課題解決策実践につながる2年生での取組は4年目を迎え、福井大学国際地域学部との連携を通して、より充実させていく。また、県内他校との意見交換の場を通して、自分自身の活動の省察と今後の展望を考える時間を設けていきたい。